

# 草庵仏教

第126号  
(発行日)  
2000年12月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 霊能力について

H「おくどさんの古くなったのを壊し、それを砕いて庭先に埋めました。それからほどなく息子が高熱を出したので、祖母が(はよう、見てもらいに行き)と言ったので、村の(おがみやさん)のところへ行きました。そうしたら、(かまど)を壊して埋めた場所が悪い。人の踏む所へ埋めたから、子供が病気になる。だから埋めた場所をお払いしなさい」といわれて、その人にお払いしてもらったら、すぐに息子の病気が治りました。こういう不思議なことがあったんですが、どう思いますか」

D「そういう不思議な現象が本当のことなのかどうか、私には分かりません。そういう不思議なことがあるのかもしれない。あるいは拝んでもらった時がちょうど息子さんの熱が下がる時に当たっていたのかもしれないが」

H「これと別の話なのですが、生駒山に修験道の荒行をしている行者さんがいて、この方はいました。その行者さんは、私の過去つまり今までどういうことをしてきたかを当てるんです。びっくりしました。また亡くなった先祖さんとも話ができるんです。それで私も身辺に困ったことが起こると、その行者さん

H「おくどさんの古くなったのを壊し、それを砕いて庭先に埋めました。それからほどなく息子が高熱を出したので、祖母が(はよう、見てもらいに行き)と言ったので、村の(おがみやさん)のところへ行きました。そうしたら、(かまど)を壊して埋めた場所が悪い。人の踏む所へ埋めたから、子供が病気になる。だから埋めた場所をお払いしなさい」といわれて、その人にお払いしてもらったら、すぐに息子の病気が治りました。こういう不思議なことがあったんですが、どう思いますか」

D「ええ、行きたいとは思いませんし、行く必要もまったくないです。私は、そういう不思議な現象がウソであると否定もしませんし、本当だと思いません。お念仏で十分人生に満足させていた方がいいです」

H「ああそうですか。こうした不思議なことを否定もしないし、肯定もしないのですね」

D「ええそうです。超能力のことを仏教では神通力といいますが、人の過去を知る力であるとか、人の心の奥を知る力であるとか、人の聞こえない声を聞く力とか、そういう超能力のことで、積尊の時代にもそういう能力を持った人がけっこういたようです。積尊のお弟子の目蓮尊者はそういう力にぬきんでた人だったと言われています。ただ積尊は超能力を使うことは慎むように言われています。厳しい修行をしていると超能力が出てくることはあり得ましよう。しかしそれは仏教のさとりではありません。仏教がめざすのはそういう能力ではなくて正しい智慧すなわち悟りの智慧を得ることです。ですから積尊は、神通力を身につけるために修行をすることを禁じましたし、お弟子たちが神通力を使うことには非常に慎重であつたと聞いています」

H「なぜ、超能力を使うことを慎まれたのでしょうか」

D「それは使いたいによっては人々を惑わしかねないからです。しかも修行者自身が正しい道からそれてしまう怖れがあるからです」

H「人にできない神秘的なことをされると、私たちはびっくりしていつべんに参るの言うままになってしまいがちですね」

D「ええそうです。神通力があることと、その人にさとの智慧があることとは別のことです。神通力も使い方によっては有用ですが、その場合は本人が煩惱を十分コントロールできていなければ危険です」

H「超能力を持っている人が人格的に清らかで煩惱を制御できているかどうかは、私たち凡人には容易にわかりませんね」

D「ええ、そうです。こんな話を聞きました。北海道の若い女の人で、やはりそうした霊的な能力があると言われていた人の所に通って、いろいろな指示を受けていましたが、感情的な行き違いでその(センセイ)のところから遠ざかるようになりました。そうしているある夜中、突然その(センセイ)から電話があり、(私の所へ来なければ、今度生まれる子はどうな子が生まれるか知れないよ)と言われたそうです。その若い女性は妊娠中でしたので、それ

## 〈親鸞聖人報恩講ご案内〉

12月22日(金)

午後2時始(念佛寺にて)

〈講師〉了信寺住職 高間重光先生

\* 報恩講は真宗門徒の一番大切な御仏事です。ご自由にお参りください。

以後その〈センセイ〉の言葉が怖くて精神に異常をきたしてしまつたそうです」

H「なるほど、霊力とか法力とかいう神秘的な力で〈おかげ〉をもらうと、その時はいいですが、それ以後その〈センセイ〉の言うことに盲信しがちになりますね。だからその〈センセイ〉からタタリやバチのようなことを言われると非常に恐ろしくなるのですね」

D「ええ、そこが一番問題の点だと思います。何か事が起こつたら〈センセイ〉に見てもらおうようになる。そうすると、その〈センセイ〉に精神的に隷属してしまい、主体的に判断をして生きることができなくなります」

H「要するに〈センセイ〉のいなりになっていく、ならざるをえなくなるのですね」

D「ええ、不思議な力を持った人に頼ると、正邪・是非の判断が自分でキツチリとできなくなり、その〈センセイ〉の言うこととでしか大事な物事を決めることができなくなります」

H「そういうことから、その〈センセイ〉に我欲があると、その〈センセイ〉に頼る人たちが振り回されたり、中にはおどされたり、多額の金品を上げさせられたりする場合がありますね」

D「そうですね。最近の事件では〈法の華〉事件がありましたね。現代の日本ではこの種の犯罪が絶えませんが、逆に人格的に高潔で、しかも霊的な能力のある人も居るでしょうね」

D「居るかも知れません。しかし居てもそういう人かどうかからは容易に判断できません。どちらにしても、霊能力者の話を伝え聞くと、たとえば家中に病人が出たりすると、それは先祖のAさんがまだ成仏できておらずその人の供養が足りなからだとか、墓の立てる方向が間違っているとか、便所の場合が悪いか、厄年だからとか言われるようです。病気とか商売がうまくいかないという原因を、私たち一般の者にはどうてい分からないことに結びつけて言われるのですね」

H「ええそうです。凡人には、どうしてなのか分からないような原因を指摘されるのです」

D「そういう話を聞かされていく内に、〈自分では分からないような災難の原因があるんだなあ〉、〈目には見えないけれども何かタタリとかバチというものがあつて、それが災難をもたらすのだなあ〉というような物の見方や考え方がだんだんその人の心に染みついてきます」

H「その人の中でそういう物の見方が次第に強くなつていくのですね」

D「ええ、そうです。そしてそういう〈センセイのおかげ〉で災難が除かれたような経験をすると、ますますそういう考え方に深入りをしてしまい、がんじがらめになりますね。〈あのセンセイはよく当たる〉という風になるのですね」

H「そうなるとその人はどうなるのでしょうか」

D「何か事が起こるたびに〈これは何かのバチではないか、タタリではないか、方角が悪いのではないか、日の選びが間違つたのではないか、先祖の供養が足りないのではないか、など事あるごとに心配になつたり不安になつたりします。なぜなら、不幸や災難の原因を目に見えない事柄、いわば自分では判断できないことの上に見ようとするからです」

H「自分では判断がつかないし、判断しても不安だから、ことあるごとに〈見てもらいに行く〉ようになるのですね」

D「ええ、〈センセイ〉の所に行つて、〈それは何代か前の先祖が成仏していないからだ。その人の供養をしないさい〉などと言われると、災難の原因が分かつたように思い、安心するのです。人は災難の原因が分からないと不安なもので、何かのせいにくきたら、かりそめの安心をするのです。その原因が傍目にはとんでもないようなことであつても、本人はそれで気休めができるのでしよう」

H「そういうえば、〈センセイ〉から、便所の位置が悪いと言われて新築の家を壊したり、できたばかりの墓をまた取り壊したりした人がいます。あるいは仏壇の場所が悪いと言われて、折角仏間がありながら、居間の入り口のような所に置いている人もいます」

D「ええ、それはそれはさまざままで、側から見ると滑稽なことを随分分されています。とにかく、超自然的な、霊的な現象を頼りにすると、逆にいろいろな事に不安を感じやすくなり、目に見えないものに対するおそれを常に感じてしか生きられなくなります」

H「霊力とか法力というものによつて病気が治つたりすることがあるのかもしれませんが、心の弱い私たちは、そういう現象に少しでもふれるとすぐに圧倒されてしまつて、自主的な判断ができなくなるばかりか、必要以上におそれや不安をいただくようになるのですね」

D「そう思います。霊的な力で病気が治ることがあり得ることまでも私は否定しません。けれども、それを行う人が人格が高潔でしかも人生のまことの道理を知っている智慧を持っているなら、害は防げるかも知れませんが、しかしそういう霊能力者がそういう徳を持っているとは限りませんので危険なのです」

H「じゃあ私のような惑いやすい者はそういう霊能力者の所には行かないほうがいいですね」

D「ええ、それが無難です。たいていの人は不思議な現象を少しでも見せつけられると、それだけで圧倒されて心を奪われ、霊的現象の世界に巻き込まれかねないので」

H「私などは巻き込まれそうですね」

今、思い出したのですが、修験道の行者さんが言われるには、こうした霊的な能力も歳を取ると減じていく場合があるのとこのことです」

D「そうですか、もし霊能力が弱まつていてそこからの指示が誤つていたり、霊能力が弱つているのに勝れた能力があるように言われるのは怖いですね」

H「霊能力が実際は衰えていて自分でそれを知つていても、〈私は衰えてきました〉などとは人には言えませんから、霊能者本人は判断があやふやになつても、人前では〈分かつている〉ようなふりをすることは十分ありえますね」

D「ええ、そうだとすると大変迷惑な話です」

H「浄土真宗では災厄が身に降りかかった時は、どう教えられているのですか」

D「転悪成善の利益ということを教えられています。このことについての詳しい話は後日いたしましょう」

# 真宗聖典講座

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行するにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

## 〈歎異鈔第八章第二講〉

（現代語訳）……念仏は、名号を称えている私どもがわからいえば、行でもなく、善でもありません。南無阿弥陀仏と称えて往生の行にしようと、自分ではからい決めて行っているような行ではないから、（行ではない）というのです。また、名号を称えて善根功徳を積みかさねていこうとはから行っているわけではありませんから、（善ではない）というのです。念仏は、阿弥陀仏から回向された全くの他力の行であって、自力をはなれた行であるから、私どもがわからいえば、善でもなく行でもないのであると仰せられました。

今回は「ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに」という点について考えてみたいと思います。

まず、他力とは（利他力）というのが本義だとお聞かせいただいています。すなわち「他を利する力」ということです。この場合の「他」とは衆生すなわち私たちのこと。利とは助けること。助けるとは、私たちがこの世において摂取（おさ

めとつて）し、浄土に生まれさせて無上覚（この上なきさとり）を完成させてくださることです。念仏して浄土に生まれ、成佛する道です。

この道に出ることが、不思議にもこの世でさまざまな智慧を生みだしてくださるのです。親鸞聖人は

「ひかりにあたるゆえに智慧の出でくるなり」（和讃左訓）

といわれて、阿弥陀仏の光にあえば、智慧が生まれるといわれています。また

「如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功徳をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひらく法則なり」（一念多念文意）

と仰せられています。これはご信心の利益には、さまざまなさとりがひらかれるといわれるのです。ここで（さまざまのさとり）といわれるのは、人生上においてさまざまなまごとの知恵が開かれてくるとの意味とかがうことができます。

阿弥陀仏の光にあえば、人生のいろいろな場面で、「こうしたら良からう」「こう考えたら良からう」「こう受け取ったら良からう」という点で、実に有り難い気づきや視点や物の見方が、不思議にもその都度与えられるのです。あっちへぶつかり、こっちへぶつかりし通しの人生において、その都度、道を開かせていただく智慧をたまわります。これはお念仏をいただく人の等しく経験するところだと思えます。

それでも、己の煩惱が深いゆえに、煩惱にほだされてお粗末なことをしばしばしてかしてしまうのも現実なのですが。

念仏しつつ浄土に生まれさせていただく道などという時、現代人には浮世離れた、なにか実人生からかけ離れたことのように受け取られるかも知れません。

けれどもたとえ、日めくりカレンダーには分かりやすい教訓のようなものが沢山出ていますが、あそこに示されている教訓や知恵で人生が本当に救われるでしょうか。

「毎日感謝」「人には迷惑をかけないように」「人には親切に」「人を責める前に己を責めよ」「心は広く、謙虚に生きよう」「日に一度は自己反省を」などなど、分かりやすくすぐ役に立ちそうな教訓が並んでいます。

しかし、こういうもので人生全体が救われるでしょうか。もし救われるのなら、毎年毎年、あのような教訓を目の前にぶらさげる必要はないのでしょうか。ああいうものを何時も壁に掛けて置かねばならないほど、いつまでもそのようには「できない」「なれない」という証拠ではありませんか。

すなわち日めくりカレンダーに出ているような知恵は、人生のある場面だけの小さな知恵にはなりましよう。けれども、私の人生のまるごと、私の生と死の全体を救う智慧にはなりません。

人生全体を救う智慧は、仏の正覚の智慧（仏智不思議）から与えられるのです。「汝、我が浄土に生まれることができる」と信じて念仏してきたれ。我よく汝をまもらん」という阿弥陀仏のみ言葉こそ、私の全人生を救う智慧の言葉なのです。

さて、「利他力」とは衆生を救う力、阿弥陀仏の本願力のことです。そこで「ひとえに他力にして」といわ

れている他力とは弥陀の本願力のことです。

私たちがナムアミダブツとお念仏している、そのお念仏はひとえに阿弥陀仏の本願力の働きなのだという意味です。私たちがナムアミダブツと称える念仏は、私たちの側からの修行や習慣や先祖供養などとして称える行為ではありません。阿弥陀仏が「汝を救わずにはおかない」として働きかけて現れたもうところの仏の行為であり、姿であるといわれるのです。

何の気なしに称えている念仏はそういう意味が本来の意味です。それを私たちが（自分からの行い）と思っているから、念佛の本当の意味を見失い誤解してしま

うのです。聖人は「化身土文類」に「本願の嘉号をもつておのれが善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず」といわれています。お念仏として称える阿弥陀仏の名号の真の意味は、阿弥陀仏の「汝をかならず救う」というめでたい名号（嘉号）であるのに、それを知らず、自分が称えて積み上げて、己の善根にしようとするから、阿弥陀仏の本願を信じる信心が起こらないのであると、聖人は悲嘆されています。

そのようにお念仏は、全く阿弥陀仏が我らに臨みたまひ、救いを告げたまひ仏の喚び声であって、まったく他力にして、私が行う自力の行ではないのです。

なおここで、自力というのは利他力に対して自力の意味です。自利する力のこと、自分を救う力のこと、自分で自分を救おうとする行いのことです。歎異鈔のこのところでは、自分で自分を救おうとはからう、己のはからいからの行いの意味です。

# 真宗は世界の宝物

宗祖が八十五歳の時、夢のお告げがあり、一つの和讃を感得された。それは「弥陀の本願信ずべし」

本願信ずるひとはみな

撰取不捨の利益にて

無上覚をばさとるなり」

であるが、この和讃には、聖人がその全生涯をかけて私たちに何を言おうとされているのかがハッキリと示されている。しかも「何を今さらまどうているのか。ここにすでに万人の救われる道があるのではないか。速やかに弥陀の本願に信順し、これを人々に伝えてくれよ」と叫んでおられるように感じられる。

こうした願いによって浄土真宗は伝達し続けられてきた。このことは私たちが考えている以上に大きな意味がある。

近年、真宗に帰依されたアグネス・エングレスカという方はポーランドで初めて真宗の信者となった女性で、医学博士でありかつ哲学博士であって、かつてはポーランドの国立精神医学研究所の助教授をしていた超エリートである。彼女は「(真宗)の信心は、親鸞聖人という一人の日本人によって述べられたものであり、非常に多くの日本の方々が、今日までこの教えを守り伝える努力をしてこられた。全人類と分かちあえるこの宝物を、泳く守り続けてくださった日本の方々の貢献というものは、人間の活動を越えたものであるように思います。これは、日本は素晴らしい業をもった国だということです。」

私は、いつかきつと世界中の人々が浄

土真宗を大切に守ってきてくれた日本という国に、非常に感謝するであろうと確信しています(平成五年の講演より)と話されている。

日本が世界の歴史に貢献しうるのは、電化製品や自動車をアフリカの奥地にまで売り込むことではない。大乘仏教の精神を伝えることである。真宗は大乘仏教の精華として、やがて世界の人々を救う智慧となるように、これを受け継ぎ伝えていくことが佛祖の大恩にこたえていく道であると思う。

(了)



拡大する場合は画像をクリックしてください

真宗の教えに

## 聞法の一つの道程

ふれて初めて感銘する。じゃあこれから聞法に励みましょうとなる。

そして、あの先生の話、この先生の話といろいろ聞かせていただく。真宗関係の書物もいろいろと読む。「ああ、こうであったか」「ああ、そうであったか」といくたびも感動し、もっと聞きたいといよいよ熱心に聞く。

こうして何年かの年月が過ぎる。真宗の教義や思想のたいへい理解できるようになる。

そうこうしている内に、先生方の話を聞いても、いろいろな真宗関係の印刷物に目を通して「これも聞いた」「あれ

も知っている」となり、初めのような新鮮な感銘はだんだん無くなっていく。そして、真宗の知的な理解はできたけど、何か心の底に不透明なモヤモヤがあることが気になる。それでも聞かねばならないと聞法を続けていく。

その内に、どれほど聞法しても、自分の心の底が「つくねん」としてることが非常に苦になる。そうして、親鸞聖人の言葉と、それが実感されないわが心との間に大きな鉄壁のようなカベにぶつかると。薄紙どころではない分厚い鉄の扉が立ちふさがる。

何とか扉を開こうと聞法をさらに重ねて、自らのこぶしで鉄の扉をなんどもなんどもたたきつけても、びくともしないし、開く気配は全くない。

それでもなお開こうと、手から血が出るほどたたき続けるが、ウンともスンともならない。「絶望したところにこそ救いがあるのだ」という予定概念がチラチラ頭に浮かぶが、それはまだゆとりのあるときの思い。

たたき続けていると、本当に(私はもう仏法には全く縁のない者)(全く信じることのできない者)(仏法からはじき飛ばされた、宗教的感性など全くない者)としてみみと感ずるようになる。

そうして(仏法はチリほどでも受けつけない私)(全く聞こえぬ奴)であると、鉄壁の前で全身が崩れてしまう。

ところがまさに崩れてしまった時が不思議にも鉄の扉が向こうから突然に開かれる時。「そのままを引き受ける」「そんなお前だからタスケル」との仏の仰せが全身に響きわたる。

もう訳も理屈もいらぬ。仏の単純な大悲の仰せが仰がれるばかりである。如

來大悲の仰せは死人のごとき者をよみかえらせてくださる。

同時に、今までの聞法のすべては「自分の聞法で自分を助けようとした」といふ方向が一八〇度逆さまだったことをしみじみと知るのである。

(了)